PHARMACY NEWSBREAK
2022年7月22日（金）

特集　連載

【戦時の医療】（上）モルドバで支援活動、重要な「メンタルケア」

福岡大・江川氏、PWJ医療チームの一員として

2022/7/22 04:50

現地での様子（提供：ピースウィンズ・ジャパン）

2月末に始まったロシアによるウクライナ侵攻。戦争状態の長期化により、近隣諸国に避難した人は約900万人（国連UNHCR協会、今月13日現在）に上るという。欧州最貧国の一つである隣国モルドバも、多くの避難民を受け入れている。特定非営利活動法人「ピースウィンズ・ジャパン」（PWJ）の医療チームの一員として、首都・キシナウ市内の仮設診療所で医療提供に携わった福岡大薬学部の江川孝教授は、終わりが見えない“戦争”という特殊な環境下では「メンタルケア」の重要性がより大きかったと語った。

江川氏は東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨などのさまざまな自然災害をはじめ、新型コロナウイルス感染症の流行初期には「ダイヤモンド・プリンセス号」でも支援活動に携わった。今回、過去の活動を通じて面識のあったPWJの稲葉基高医師から依頼を受け、4月16日から1カ月間、現地に赴いた。

医師と看護師で4月7日に開設した仮設診療所は、江川氏の合流を受け3人体制で運営。江川氏は調剤業務を行いつつ、診療所内の医薬品の整理も担当するなど、薬局機能の立ち上げと、薬剤師以外の医療従事者でも医薬品管理ができる体制の整備に取り組んだ。具体的には、▽医薬品の整理▽医薬品の調達ルート確保▽服薬指導時の通訳の手配▽在庫管理体制の整備▽医師・看護師・患者への情報提供体制整備―などだ。医療チームの撤収時を見据え、仮設診療所の薬局内に残った医薬品を現地の医療機関などに寄付する体制の確立も目指した。

●避難で「痛み」「発熱」、ストレスで「高血圧」も

モルドバでは避難所だけでなくアパートやホテル、ホームステイなどさまざまな形で避難者を受け入れており、避難所には地元の医師らが運営する救護所が設置されていた。そのため仮設診療所では、市の要請を踏まえ、避難所以外に滞在

する避難者の医療ニーズに対応。1日当たり20人弱の患者を受け入れた。避難者の約7割は女性。残りの3割を占めた男性は、高齢者や重篤な慢性疾患を抱える人だったという。ウクライナの首都キーウや、ハルキウ、オデーサなどさまざまな都市から避難してきていた。

患者が訴える症状で最も多かったのは、「痛み」や「発熱」。地下の防空壕に長期間、避難していたことで筋肉痛になっている人などが多かったという。次いでストレスによる「高血圧」や、戦争による不安や不眠などの「メンタルヘルス」が多く、「診療中に泣き出す方も多かった」と振り返る。

●「せきを切ったように」話し出す避難者

患者に対する質問は、「どこから避難してきたか」といった会話のきっかけとなる内容にとどめたが、地元の話をきっかけに、避難者の方から「せきを切ったように話し始める」ことも多く、「自分の家が空爆で燃えている動画」を見せてくれた人が印象に残っているという。

不眠を訴える患者に対しては、もともと睡眠障害改善剤ゾピクロンが処方されていたが、抗不安作用がそれほど期待できないと考え、伝統的な抗ヒスタミン剤であるクロルフェニラミンの処方を医師に提案。加えて、看護師の提案を受けてラベンダーの香り袋も一緒に渡すようにした。欧州にハーブの文化があることを踏まえた対応で、江川氏は「調剤を待っている間に渡しておくと、少し表情が和らいでいた」と効果を実感したという。

現地にはハーブを主にした民間薬も存在し、患者が要望した場合には処方薬と併せて渡すこともあった。効果に疑問はあったものの、「プラセボ効果も期待した。（何より）安心してもらえるので」と、現地の文化を尊重した対応を心掛けていた。

●戦争で「家族がばらばらに」

江川氏は戦争と自然災害の違いについて、「家族がばらばらになっている点が大きい」との見方を示す。不安を吐き出す相手がいないだけでなく、戦うために夫と息子がウクライナ国内に残っているという事情を抱えたケースもある。そうした状況でも一人一人と向き合って対応していく中で、子どもの患者が後日、母親の手作りケーキをくれたことが印象に残っているという。一緒に持ってきてくれたタンポポは、ドライフラワーにして今も飾っている。（盛川 太一）

オンラインでじほうの取材に応じた江川氏

All documents,images and photographs contained in this site belong to JIHO,Inc.
Use of these documents, images and photographs is strictly prohibited.
Copyright (C) JIHO,Inc.

株式会社じほう